

言語と現代人の感性

— 科学的言語と詩的言語の諸相 (II) —

多田博生

(I)

本稿が目的とするのは、『科学と現代人の感性』⁽¹⁾と題した前稿に引き続いて、自然科学およびそれと緊密に結びついた科学技術の著しい発展が人間の感性や思考法そして言語観に及ぼした影響について考察することである。

その中でも主眼をおくのは、表題にも見るように、科学と総称されるものの強大過ぎる影響下にある現代人の感性と言語の関係について考えることである。

言語というものは、いったん真剣に考え出すと、ついには人を迷宮のような世界に引きずり込んだり、逆に自己満足の落とし穴に落ちてしまいかねないほどの複雑な性質を備えているものであるが、一般には言語のそういう姿はほとんど理解されておらず、言語とは単なる情報伝達の道具でしかないと思込んでいる人の方が圧倒的に多いのである。

たとえば、歌人の岡野弘彦氏はこう語っている。

「大学の教師になって、現在まで何度、古事記や万葉集をくり返し講義してきたことだろう。今の学生は、最初に読む古事記に対してすぐに、歴史的、語法的、神話学的な知識を無理やりに先だてて、解明してかかろうとする。それ以前に、血のかよった我々日本人の神話なのだから、昔の村人が長老から神話を語り聴かされているような、初い初いしい感動で、まず一度古典に触れてごらんと言うのだが、それができない。日本人の心の表現である物事も歌も、本来のみずみずしい受容を失って、戦後の日本では刻々に化石化してしまっている。」⁽²⁾

岡野氏の思いは、芸術関係に携わって、その立場から若い人に接している人間にはよくわかるものである。現代の人は、絵を見ても、音楽を聴いても、そこに客観的な情報と意味を探り出そうとする傾向にあるといわれるが、おそらくその判断は大きくは誤っていないのだと思う。

そういう感性を持ってしまった人に、言語は一般に考えられているよりもずっと精妙なものであると伝え、それを理解してもらうには何をどのように語ればよいのかという問題には誰もが苦慮することだろう。

それは、あらゆる点で現代人に圧倒的な影響を及ぼしている（自然）科学的思考法や科学技術と密接に結びついたことであり、一朝一夕にどうなるものでもないと思定めた上で、いろいろな観点から、諦めずに、厭きずに語り続けていくしかないことなのだろう。

ここでは、言語が自然科学的思考法の影響を受けるとはどういうことなのかということ、自然科学が金科玉条としている検証可能性という観点から考え、それとは異なる働き方をする詩的—文学的あるいは想像的といってもいい—言語の性質の一面にふれ、それに続いて、

事実や情報を伝達するための文章と文学的（想像的）文章の差異に言及したいと考えている。

まず検証可能性のことだが（それは実証性、再現性と言い換えてもいい）、その条件に合う結果を出すためには扱おうとする事がらを客観化・対象化する必要がある、信じるとか信じないとか、好きとか嫌いといった個人の主観が関係するところから引き離して、誰の目にも同じように操作できるものとして提示することが必要になる。端的な例として、 $1 + 1 = 2$ のような形にする必要があるといえる。

そのように客観化・対象化された事がらは、私たちが好きなように扱うことができるようになったわけであり、必要な知識を蓄えていけば、それらを操作して自分たちが望むものを作り出したり、実現させたりすることができることになる。

見方によれば、これほどすばらしいこともないわけで、私たちの身の回りにはそうして作り出されたものがあふれている。しかも手法さえ学べば同じことが世界中の誰にでも可能なのだから、「科学的なもの」がこれだけの影響力を持つのは、この観点から見ても当然というべきだろう。そしてその成果のあまりの偉大さを目の当たりにした人々が「科学技術信仰」ともいえる心性を身につけていったのも無理はないといえる。

そういう社会で用いられる言語の方に目を向けると、自然科学の世界で使用される言語は曖昧性をできるだけ排除したものがふさわしく、できるなら数式か化学式に近いほどの客観性を持った言語が望ましいわけである。

自然科学ほどではないが、人文科学や社会科学にも客観性の高い言語を必要とする分野は多い。それに日常生活の中で情報伝達のために用いる言葉も相応の客観性を必要としている。たとえば、「明日のA先生の講義は第3教室で行う」という情報は関係する全員に正しく理解されなくては用をなさないからだ。

そういう客観性の高い言語を駆使して構築された世界に生まれ育ち、毎日をそういう言語に囲まれ、自らも使用している人が、言語とはそういうものだと思い、あらためて言語の複雑微妙な性質について思いをめぐらすこともなく日常生活を送っていても別段不思議なことではないだろう。

たとえば、人がいったん習得した言語はその人の思考様式や発話をしばってしまうものでありながら、しばられている本人にはその自覚がないという不思議な性質を持っていることに気づくこともないだろうし、そういう言語では人間と世界についての複雑微妙な面について理解することはできないために、いつしか自分の精神生活も人生そのものも浅く、貧しいものになってしまうことにも気づかないだろう。

その結果どのようなことが起こってくるかについては私たちの社会のありさまを凝視してみればわかることだが、一言で抽象的にいえば、人々の考え方、価値観が単層化してしまい、その一つの層の中での違いしかなくなってしまうことである。その唯一の層の中では自然科学的な原理が圧倒的な力を持っているのであれば、「若いこと、美しいこと、頭が良いこと、強いこと」という四条件を一つでも多く満たしていることが人間として価値のあることであって、その条件からはずれてしまった人間には何の価値もないということになるのもある意味では当然といえよう。

そしてその枠組みに違和感を持つ人、特に若い人が対抗する原理として怪しげなオカルトを持ち出してくる気持ちもわからなくもない。ちなみにオカルティズムが世界的に、しかも

爆発的に流行している状況は何を物語っているのでしょうか。

(II)

人間は絶望するがゆえに動物よりすぐれているという旨のことを言ったのはキルケゴールだったと記憶しているが、キルケゴールの言葉をまたずとも、普通の人なら中年に至るまでに一度ぐらいは絶望するような状況に直面するものだろう。

それは、よくいわれるように、人間の成長、発展に欠かせない経験なのかもしれないが、天地人のいかなる力をもってしてもどうすることもできないと感じられる状況に立ち至ることとは何としても避けたいのが人情というものであろう。

しかし人間は人間であるがゆえに、必然的に絶望に直面せざるを得ないとしたら、科学的世界観・言語観を自明のものとして生きている多くの人たちはその時にいったいどうするのでしょうか。

もう少し具体的にいえば、たとえば自分自身あるいは自分にとって大切な人が不治の病と診断され、あとしばらくの命と宣告されたような時には、私たちは表面はどうあれ内心ではそれまで経験したこともない激しい感情の渦の中に立ちつくすことになるのではないだろうか。そしてそれを契機にして、自分は、そして自分の最愛の人がなぜ死ぬのか、人は死んだらどうなるのか、人はどこから来てどこへ行くのか、そもそも自分が、人がこの世に生きている意味とは何なのか、といった根源的問いかけまでが意識に上がってくることも予想されるわけだが、そういう問いに対しては門前払いをして答えないのが科学というものであり、たとえ科学的観点から答えを示してもらったとしても満足できる人は何人いるのだろうか、ということなのである。

そういう人には哲学、心理学、文学があり、宗教があるではないかという意見もある。たしかにそこで求めるものに出会う人もいるだろう。だがそこには求めるものが見つからず、悩み続ける人もまた多いのではなかろうか。

それについて考え出すと際限がなくなるので図式的にいうが、現代では社会的に認められているほとんどすべてのものが自然科学の影響を受けており、そこで使われる言語も同じ影響下にあることが多いわけであれば、悩み苦しむ人の目には、それらもやはり理性的な世界を形成して、人間の心の外側に冷然と存在しているように見えてしまうのではないだろうか。そして、真剣に救いを求める人の目にそういうようにしか映らないものが、人間の運命とか生死に関する強烈な情念に対して効果的に対応できるとは思えない。

宗教は例外かもしれないが、悩み苦しむ人はその状態にあっても自然科学的世界観・言語観の影響下にあるわけだから、たやすく宗教的世界に顔を向けるとは考えにくい。それに宗教者も、特に社会的に容認されやすい宗教にかかわる人自身も自然科学の影響を受けてしまっている場合もあって、宗教といえどもなかなか力を発揮しにくい状況にあるのではないか。

オカルトが流行し、カルト宗教に人が引きつけられるのは、端的に言って、それが自然科学的原理の枠組みをはずれたところに存在しているように見え、しかも自然科学によっては説明することができそうもない「超常現象」なるものを引き起こしてみせることがあるために、あたかもそれが自然科学的原理をもその中に包み込むほどの新指導原理のように見えたり、感じられたりする場合があるからではないか。

自然科学的対応ではどうすることもできない状況に直面した人や、現在の世界の姿に違和感を抱く人にとってはそれが一筋の希望の光に見えることがあることは理解できる。しかし、その点は理解したとしても、良識的な観点から考える時、それはやはりどこかで現実から遊離し、自分も他者も幸福にはしない道なのではなかろうか。

このように見てくると、現代社会においては、科学的に対応することが難しい状況に立ち至った人は、たとえば絶望する人は暗い悲哀のうちに沈んで懊悩しているしかなく、そこまでいかずとも、人間として当然の精神的苦悩に直面した人は難しい顔をしているしかないのかということになる。

一年に二万人を越える人が自ら生命を絶っていくという事実は、そのように感じている人の数が私たちの想像する以上に多いことを物語っているのかもしれない。

だが観点を交えて、たとえば良寛和尚や道元禅師だったらその人たちに何と云うだろうかと思案をめぐらすと、あるいは「苦しむ時は苦しむのがよろしかろう」と一見冷酷にも聞こえる言葉をかけることもあるのではないかとも思われる。そして真正な宗教者であれば、いや宗教者だけではなく、深く人間と世界について思索してきた人であれば、その言葉がどれほどの体験と叡智に裏づけられているかを理解できるだろう。

たとえばユング派の精神分析家として高名な河合隼雄氏は「真の解決策は常に万策尽きたと思うところから生まれるものである。すべてがだめと思われる時でも待つことと希望することをしぶとくやっていると不思議な解決策がそこにもたらされてくる。悩んでいる人のために何かをしてあげたがるアマチュアの人はこの頃たくさんいる。しかしそのような善意はしばしば人を傷つけるのに役立つことが多い。悩んでいる人のそばにあって、何もせずにいられるのは鍛えぬかれた専門家でないともむずかしい」という旨のことを語っている。⁽³⁾

私たちが科学技術という力を手に入れる代わりに見失ってしまったのはそうした叡智に立脚した世界と人間についての理解だったのではないか。そういう叡智を再び自分たちのものにするのは難しい仕事になるかもしれないが、それぞれの立場で思索し、特に若い人に語り続けていくことが肝要であろう。

(III)

話を私たちの意識や感性、それに単層的な意味しか持たなくなってきた言語の方に向けると、そのような状況の中で芸術や宗教は往年の勢いを失わざるを得なくなったが、最大の被害者ともいえるべきは文学である。

文学の退潮の著しいことは底なしという感じで、それがあまりに行き過ぎた結果か、最近では文学の失地回復の動きもあるという慰めにもならない意見も目にするようになった。

文学とはいってもなく言葉を用いた芸術である。その主な仕事は人間と世界に関する森羅万象を言葉を用いて描き出すことである。したがって文学が必要とする言語はそれだけの要求に応え得るだけの性質を備えたものでなくてはならない。そしてそういう言語で描かれた世界を理解してくれる読者も数多くいてくれなくては困るわけである。

しかるに言語は日々精妙さを失いゆき、読者の多くは文学的文章と論証的文章の違いさえ理解してくれなくなってしまった。そんな環境では文学はとても生きてはいけない。ことに詩歌や神話というジャンルにとって、それは致命傷に近い打撃を与えることになる。

ちなみに一昔前なら誰もが知っていた短歌、たとえば次のようなものを現代の人に示して、意見を求めたらどうなるだろうか。

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかざりけり

あるいは、恋愛の価値が極端に貶められていた太平洋戦争中に軍事工場に動員された中学生たちが、わずかの休憩時間に隠れ読みして感慨にふけたとも伝えられる佐藤春夫の「海辺の恋」などはどうだろうか。

こぼれ松葉をかきあつめ

をとめのごとき君なりき

こぼれ松葉に火をはなち

わらべのごときわれなりき (初一連のみ)

おそらく期待通りの反応は返ってこないと思う。現代の人は上のような詩歌さえ「客観的な言葉」で書かれていると思い、その観点から「理解して何らかの情報を得ようとする」のだから、詩歌がかもしたず情趣も何もあったものではないだろう。

誤解を恐れずにいうならば、文学の言葉、特に詩歌の言葉はイメージを呼び起こすように用いられていて、一つの言葉が呼び起こすイメージが更に別の言葉からのイメージと響き合い、重なり合い、それが更に異なるイメージを呼び起こし、そこに無限にまで響きわたると感じられるほどのイメージの世界が広がり、その微妙な作用の中に揺らぎ、ただよう時、人はいわく言いがたい情趣を感じ取ることができるのである。

詩歌の特長を教え上げればそれこそ際限もないくらいに出てくるだろうが、それが現代一般の人に理解されるかどうかはわからない。というよりも、特長を力説しようとしても、そもそも耳をかしてくれるかどうかわからないのである。

ここまでの痛手を負った詩歌がその本来の姿を取り戻し、自らの役割を果たせるかどうかについて明るい見通しを語れる人は少ないと思う。その厳しさは、先に引用した岡野弘彦氏の言葉にも表れているとおりである。

私にも妙案があるはずもないが、単に詩歌軽視の風潮に流されていくのと、その本来の意味と効用を少しでも知っているのでは、長い人生のどこかで大きな違いが出てくるかもしれないので、自分が関心を持てる方向から詩歌について一考だけでもしておくのが良いのではないかと思う。

たとえば、近年は人間とイメージの重要な関係について科学の方から光が当てられ、イメージトレーニングとかプラスイメージによる願望充足法とかの言葉が一般的に用いられるようになった。それがどういう展開を見せるかは別として、どうもイメージと人間の間には、日常の社会生活に適應して生きている私たちには思ってもみないほどの不思議で、豊かな関係が存在するようなのである。

それについて、藤岡喜愛氏は好評を博した『イメージと人間』(NHK出版)の中で、人間はイメージタンクの所有者であると語り、さまざまな学問分野を展望しながらイメージがいかにか人間存在の根源にかかわっているかについて考察している。その中からここで議論していることに関係のありそうな点にしぼって氏の考えを引いてみたい。氏の言葉をそのまま

全部引用する余裕はないので、私の判断で氏の言葉をつなぎ、かつ氏の主張を要約する場合もあることを断っておく。

「私たちの一人ひとり、それぞれ自分のイメージの世界を持っている。一人ひとりにそれぞれの人生がある。その精神の内容を形づくっているのは、それぞれのイメージの世界である。それは普通には『内的世界＝内界』という呼び方もされるけれども、独自のイメージの内容を持ち、それ自身の運動様式を持っていて、素朴な意味での『外的世界＝外界』とは関係のない働きをさえしている。そのイメージのすべての集合、内界の総体を便宜上、Hとする。

いっぽう私たちの一人ひとり、それぞれの『外的世界＝外界』を持っている。外界はそれ自身の内容とその運動様式を持っている。私たちの希望や絶望とは関係なく、昼夜は交代し、天地や山川草木がある。力学を先達とする物理学的自然科学が、とりわけ外界の運動を理解する努力を重ねてきたし、外界の内容を知ろうとして博物学が莫大な知識を集積してきたのであるが、そうした努力を必要とするほどに、外界は、内界あるいはイメージ集合・Hとは様子の異なる、もう一つの独自の世界である。それを外界集合・Fとする。

そうすると私たちは、ここに二つの独自の世界、内界・Hと外界・Fとを見ている。このままではHとFとは縁のない世界である。それゆえイメージ集合の中のある一つのイメージと、外界集合・Fの中のある一つのものとを関係づけて対応させる『何か一つのもの』がなければならぬ。それを『知覚』と呼ばれているものであるとし、知覚のすべての集合をGとする。

私たちの精神の絶えざる働きは、知覚を仲立ちとしてFとHが対応し合っているところで認められる作用である。

地理的に同じ谷に入り込んでも、芸術家はそこに天地創造につらなる象徴的な風景を認めるかもしれない。土木の専門家にはダム建設の適地として見えることもあるだろう。感覚生理学の立場から見れば、二人はほぼ同じ感覚（空間性、明暗、色彩などの、眼その他からの感覚）を受けているはずだけれども、それらからまとめられるそれぞれの知覚・Gは、それぞれのHの影響によって異なり、Hそのものはまったく別のイメージになっている。⁽⁴⁾

そのことからだけでも以下のことを導き出せると思うが、藤岡氏は、この後、感覚遮断室や麻薬指定化前のLSDを用いたイメージ実験を検討した上で、「したがって、Gを介在させてのFとHの対応は、けっして関数的な一対一の対応ではない。F_i—G_i—H_iが習慣的に成立しているときでさえ、同じH_iが別の場合には、G_jを介してF_kを対応させるといことが生じうる。いいかえれば、FとHとの対応の仕方は常に“アソビ”を含んでいる。このアソビこそは精神と生命を存続させる本質的な性質であると私は考えている」と述べている。⁽⁵⁾

そうであるとすれば、内心から湧き上がってくるイメージを、それを表すのにふさわしい言葉を巧みに用いて外界に向かって歌い上げ、そこに一定の遊びを含んだイメージの世界を作り出そうとする詩歌の働きは私たちが思う以上に重要な意味を持っているのではなかろうか。

藤岡氏や他の研究者による感覚遮断室での実験やLSDを用いた実験から得られた結果も詩歌の意味を考える上で有用かもしれないのもう少しその周辺を見ていこう。

藤岡氏は、「われわれのGとHとは巨大な外界・Fの恒常性に支えられて、Fに対応している知覚・Gとイメージ・Hも安定性が保たれているという事情がある。地震、洪水など、いったん、恒常的でないFの内容に接触すれば、われわれのGやHは容易に錯乱する。習慣的、日常的な外界・Fを遮断すると、知覚・Gやイメージ・Hは自由に運動するようになる」との旨のことを述べて、その例を感覚遮断実験やLSD実験に探っている。

その結果は、前者では、「私たちの好奇心を満足させるようなイメージ・Hの出現はあまり多くはないが、これは幻覚だと自分にいきかせて、消そうと思っても消えない」幻覚の例がいくつか報告されているにとどまっているが、後者の方では、「日常生活では思いつきもなかった『自分』を見、SF的な空間まで体験した。そこにはたくさんの外界・Fから解放された自由な知覚・Gと自由なイメージ・Hがあった」と報告している。

感覚遮断による人間の意識状態の変化に関しては、1950年代から60年代にかけてアメリカでさかんに研究され、藤岡氏の実験結果を支持するような報告が多数なされているという。⁽⁶⁾

その中でも奇抜で目立つのはイルカの研究や脳と意識の研究で有名なジョン・C・リリー(J.Lilly)のもので、彼は徹底的な感覚遮断実験を通して驚くべき内的感覚の変容を体験したと報告している。

それについては彼の著書の *The Center of the Cyclone* (邦訳名：『意識の中心』) や *The Scientist* (邦訳名：『サイエンティスト』) に詳しいが、特にLSDを併用した時は、自分の意識が肉体を離れ、行きたいと思ったどんな空間にでも行くことができたし、自分の肉体細胞の中へでも、あるいは素粒子レベルの世界へも行って、そこで起こる現象を観察することもできたという。その上、自己の「守護神」とも思われる三人の霊人と出会い、彼自身も含めた人間と世界の存在の意味や、地球と人類の未来について教えられ、語り合ったとも書いている。

そんなことを言い出す人間の言葉など信用できないし、そもそもそれはLSDという麻薬の影響下での体験なのだから、初めから現実性の欠落した現象なのだという感想を持つ人も少なくないと思う。

彼のことを「マッドサイエンティスト」と蔑称する人もいるのだから、リリーのようなタイプの人の言うことに対してはそれなりの留保をつけねばならないのは当然としても、上に引いた2冊の著書を読むかぎりでは、彼自身も自己の体験に懐疑心を持ちながら自分の意識の世界で起こっている現象を記述していることが伝わってきて、読者が一種の安心感を感じながら、人間意識の不思議さや内的イメージの豊かさなどに思いを馳せることができる点は認めてもいいと思う。

これをつけ加えることがリリーの「名誉」のためになるかどうかかわからないが、ノーベル物理学賞を受賞したR.ファインマン(R.Feynman)もリリーの感覚遮断実験に参加して、自分の意識が肉体を抜け出していくという体験をしたり、自由自在に「幻覚」を見ることができるようになったと報告している。⁽⁷⁾

考えてみると、人間の意識に関するその種の話は昔からあるわけで、たとえば禅宗などでも悟りに至る途中に「魔境」があり、そこではさまざまな幻覚ともイメージともつかぬものが湧き上がって修業者を迷わせるというし、その他の宗教や芸術の分野を探れば似通った例

は数限りなく見いだせると思う。

現代の若者に名前の知られた研究者、たとえば『アウトサイダー』(*The Outsider*)で世界に名を馳せた英国の作家・思想家のコリン・ウィルソン(C.Wilson)は、人間意識の拡大・深化・進化こそが人類存亡の鍵になると主張して、その考究にほとんど一生をかけてきているし、トランスパーソナル心理学の方では高名なスタニスラフ・グロフ(S.Grof)はホロトロピック・セラピーという意識変容法を開発し、その行法を通して奥深いところに潜在している意識を表面に引き出し、個我にとらわれた人間の意識を解放し、無限とも思える精神世界に到達させようと企図し、相当の成果を見せているようである。

そういう観点も視野に入れると、もはやリリーの言うことは不可解ではなくなり、むしろ日常意識こそが正しく、健全な唯一のものと思っ込んでいる私たちの考えの方が貧しく、狭隘に過ぎるものとして映るから不思議である。

藤岡氏は先に引いた著書の「あとがき」で、「私はとうとう確信することができた。われわれの精神は、このイメージ界の活動によって支えられている」と述べているが、この一見には奇異とも思われかねない発言も、人間とその意識を真剣に考究した人の言葉として受け止めてみる価値はあると思う。

(IV)

詩歌の意味と効用をめぐる、イメージと人間という観点からほんの少し踏み込んでみても、人間精神の底知れぬ奥深さと豊饒さを予感させる世界が垣間見えてくる。

それは、しかし、現在の自然科学の枠組みには納まり切らない世界であり、自然科学の影響を受けている精神科学からもアブノーマルなものとして切り捨てられかねない世界でもある。

日常意識を守ることは、人間が、特に社会を形成して生きていく上では重要なことはいうまでもない。けれども、日常意識の抑制を少しはずしてみれば、そこには潜在意識の広大な世界の入口が現れてくることも事実であり、芸術や宗教はその世界を創造性の源にしているといってもいいだろう。

類型的に考えるなら、その両者が調和して機能していくことが望ましいのだが、後者の方は、いかに豊饒で創造性に富んでいるとはいっても、一般の人にはとても対応し切れない多種多様な「常ならざる現象」が渦を巻いている世界であれば、安易に近づくのも危険であろう。しかし逆に、それほどの豊かさを秘めた世界の存在にまったく気づかず、あるいはその価値を不当に低く評価したまま生きていくのでは、その人の精神生活は弾力性を欠いた、偏狭なものにもなってしまうだろう。

そこで「詩歌のすすめ」を持ち出すのも安直な印象があつてつらいが、私たちの内部には広大な潜在意識の世界が存在し、そこでは幾多のイメージがいきかい、その活動が私たちの精神生活に少なからぬ影響を及ぼしているものだとすれば、そのイメージと深いつながりを持つ詩歌を折にふれて詠み、口ずさむことは、私たちの精神生活を想像以上に豊かにし、場合によると健全なものにもしてくれるといってもよいのではなからうか。

そういうことを考究するのが詩論や文学論の大切な役目といってもいいわけで、事実すぐれた研究に接すると、詩歌だけではなく、文学・芸術の意味に関して目を見張るほどのこと

を教えられることもある。

そういった意味での文学的教養がもっと広く一般のものになることが望ましいし、必要なことだとも思うのだが、現代の文学理論には難解なものが多く、結果的に一般読者の文学離れに一役買うことになってしまっているのは何とも皮肉なことというしかない。

しかしそれでも、文学も含めた芸術というものが人間にとってどのような意味を持っているのかという点について、さまざまな観点から語り、できるかぎり多くの人の理解を得るよう努めることの重要性は何度強調してもよいと思う。

そのための参考書を募れば、古今の名著が数多く並ぶと思う。それを一般の人が読んでくれるかどうかは疑問としても、その本を読んで感銘を受けた人が、その内容を自分の言葉で語ることは決して無意味なことではないだろう。

私としては、ここで、輪島士郎氏の『T.S.エリオットの詩と真実』（高島出版）を推奨したい。この本は地方の（石川県金沢市）小出版社から刊行されたためか、その内容のすばらしさに比べると知名度がいまひとつの感がある。しかしこういう著書に接すると、詩歌も含めた文学、いやそれ以上に芸術という人間の活動は真に私たちの存在の根源的な部分にかかわったものなのだという、そして言語と人間の間にかに重要な関係があるものかということに圧倒的な迫力を持って教えられる気がする。そして、あらためて私たちの言語理解の貧しさを思い知らされるようにも感じる。

この本は詩と詩論の高度な研究書としての性質上、専門外の人にはやや難しく感じられる部分もあるが、それを乗り越えてでも読んでみるだけの内容に満ちていると思われる。

たとえば、輪島氏は同書の中で、T.S.エリオットは詩の働きを次の三点にまとめたとしている。

- 一、感性に変革をもたらすこと
- 二、「習慣的な知覚と評価の様式を解体して」世界を新しく見直すことを可能にすること
- 三、「われわれの存在の基体を形成する一層深い、名づけられない感情」を自覚させること（221ページ参照）

そして、エリオットと同時代の著名な哲学者の R.G.コリングウッド（R.G.Collingwood）の「芸術は精神の最高の病、意識の腐敗に対する共同体の治療である」との卓見も紹介している。（218ページ）

詩歌のみならず文学・芸術の意味を考える上でも同書の一読をすすめたい。

詩歌についてある程度考察していけば、そこで用いられる言語は日常の言語とも学問の世界で使われる言語とも異なる性質のものであるということや、言語には客観的情報を伝達する以上の役割があることについても大方の理解は得られると思う。

それに詩歌も含めた文学・芸術と人間の間には想像以上に重要な関係があることも感じ取ってもらえるかもしれない。

それがすぐに現代の人の「科学的感性の厚い壁」を揺さぶることができるものかどうかは疑問である。なにしろ現代の多くの人にとって、一連の価値や理念、あるいは人間のあるべき倫理的規範を提示するのは科学なのであり、その意味で科学は一種の「神」のようなもの

にまでなっているともいえるからである。

しかしそのような状況は望ましいものではないのだから、即効性は期待できなくとも、そして見通しそのものも暗いとしても、私たちは言語の精妙な性質について語り、それだけの言語を操る人間と、その人間を生み出したこの世界の不可思議ともいえるほどの絶妙な姿について、それぞれの立場で思索を続け、それを語り続けていく努力は放棄すべきではないだろう。

言語に関していえば、これまでも述べてきたように、言語とは必ず一定の意味を備えたもので、事実や情報を正確に、そして強力で伝達するための道具なのだという言語観は一方に偏ったものであり、そういう言わば「科学的言語」で理解できるものは限られているし、そのような言語観しか持てない人の人生も偏った、潤いのないものになりがちだということを広く一般の常識にする努力は続けていかななくてはならないだろう。

もちろん、それが行き過ぎると、今度は逆の偏りが出てきて、問題の重要性からいえば、そちらの偏りの方が危険かもしれないが、日常的に文学作品に接していれば、そうした危険性はかなり減らすことができると思う。

そのわけは、文学とはそれを書いた人特有の意味を含む言葉を用いて、その人独特の世界を形成する性質を持ったものなのだが、同時にその世界が普遍性を帯びる性質も備えているものだからであり、そういう言語の使い方に関わりながら接していれば、一方に偏らない言語感覚を自分のものにすることができるのではないかと思うからである。

もう少し具体的にいうとすれば、たとえば人と人の中で言語によるコミュニケーションが成り立つ場合は、その言語に関しての共通の了解事項が両者の間にあることが前提となる。つまり、犬という言葉で両者の会話が成立するとしたら、その言葉が意味する定義とまではいわずとも、最低限の骨子、たとえば、犬の手足は四本、尻尾は一本、全身を体毛が覆い、ワンという鳴き声を出すということぐらいは両者が共通して理解している必要がある。

しかしそこには犬という言葉を使う人の気持ちは入らないのが普通である。たとえば、幼い頃から犬を家族同様にして育ち、犬が大好きという人と、幼い頃に犬にかみ殺されそうになり、犬と聞くだけで震えてしまう人とは、同じ犬という言葉にこめる意味は大きく違う。そういう両者の間で犬という言葉が通じるのは、その定義や骨子の部分が同じだからであろう。

「科学的・客観的言語」とは、言わば、その定義の部分だけを用いて客観的情報伝達を目指したり、事実を検証したり、何らかの世界を構築しようとするものであろう。そしてその威力のほどは誰もが知っているところでもある。

しかし、そこからもれてしまったものの扱いはどうなるのだろうか。自分の気持ちとか思いは、その人にとっては重要なものである。そういうものは家族や友人関係の中だけにとっしておいて、学校や社会へ参加する時は客観的言語だけを使えということになるのだろうか。

それは一見もっともらしく聞こえるが、しかし、私たちの気持ちとか思いといった主観的な部分を軽視して、合理性や論理で説明できるものだけを重視する生き方をあまりに長く続けると、ついにはその社会全体が健全なリアリズムを喪失してしまい、結局はそこに生きる人に不幸をもたらしかねないことは強調してもよいと思う。

そういう意味でも私たちは自分が使っている言語を豊かな可能性を持ったものにしておく

必要があると思うが、自力で豊かな言語感覚を身につけることもままならない私たちであれば、時を見つけて作家や詩人の作品にふれることが良いのではなかろうか。

(V)

文学作品にふれることの意味は言語感覚の問題に限られるわけではないが、それは別の稿でも考察したことがあるし、それについて書かれたすぐれた文学論が数多くあるので、ここでは小説に用いられる言語の特徴のいくつかについて語ろうと思う。

なぜなら現代の多くの人は、小説は詩歌や神話とは違って事実の描写を積み重ねた合理的で客観的な構築物だと考えているからであり、それがまた言語についての種々の誤解や錯覚につながっているからである。

そのような意見を耳にしてかえって怪訝な思いをする人も多いかもしれない。つまり、小説は普通の感覚で読んでわかるように書かれているし、そこから多くのことを学び取ることもできるのだから、小説を書く作家の感性も、そこで使われる言語も私たちが日常的に用いているものと似通っていて当然ではないかと感じる人が予想よりも多いかもしれないのである。

それは微妙な問題を含んだ問いかけであるが、それでもあえていえば、小説もやはり文学なのであるからには、本質的には詩歌や神話などと同じような性質のものであって、その中身は合理的に構成された構築物にはなっていないのである。

納得が行かない気持ちになる人も多いと思うし、そういう場合には自分が気にいった文学論なり小説論なりを読んでもらうのが一番いいと思うけれども、自分で小説を書いてみることもすすめたい。そうすれば小説とは、そして文学とは、手紙やレポートとは別種のもので、決して自在に生み出せるものではないことが実感できるかもしれない。

そのあたりの詳しいことは多くの文学論の方に譲りたいし、創作の「実験」にも期待したいが、ここでも一つ、二つの例を挙げてみたい。その例としては、文学作品の特徴的な面を際立たせるという観点から、一般的にはあまり言及されることのないものを選んでみたい。

たとえば、十九世紀英国の文学史に綺羅星のごとく名を連ね、世界的にも高名な小説家である W.M. サッカレー (W.M. Thackeray) や C. ディケンズ (C. Dickens), それに G. エリオット (G. Eliot), あるいは R.L. スティーヴンソン (R.L. Stevenson) といった作家たちが、創作に際して自己の内面で起こる不思議な体験について異口同音に語っていることがあるのだが、それについてふれている文学の解説書はあまりないようである。

サッカレーはこう言っている。

「私は、自分が書いたある登場人物の言葉に驚かされたことがある。まるでオカルト的な力が、ペンを動かしていたように思われるのだ。登場人物が何かするか言うかすると、私は『一体全体、彼はどうしてそんなことを考えるようになったのか』と思うのだ。」

あるいはこのようにも言っている。

「私が登場人物を支配しているのではない。私は彼らの手の内にあり、彼らが私を彼らの望むところに連れていくのだ。」

G. エリオットは自分の夫に対してこのように語っているという。

「私が自分の最高傑作と見なしているものすべての中には、私を占有している『私自身で

はないもの』があり、私は自分の人格を、この精神がいわば活動するための道具にすぎないと感じています。」

ステューヴンソンは自分の物語の筋を作ったのは彼の「小人たち」であるとしてこう言っている。

「彼らは私がぐっすり眠っている間に私のために仕事の半分をしてくれて、人間の常として、私がすっかり目覚めていて自分でそれをやっているとあさはかにも思っている時にもまた、その残りを私のためにしてくれる。」

ステューヴンソンは自らの意識的な自己とは「良心と、出し入れ自由の預金口座を持った男」にすぎないとして、このようにも言う。

「私はときどき、この意識的な自己はまったく語り手などではないと思いたい気持ちにかられる。だから、その説明からいけば、私の出版された小説のすべては、ブラウニーだの、ファミリアだのといった、私が屋根裏部屋に鍵をかけて閉じ込めているなんらかの见えない協力者の手だけによるものであり、私はすべての賞賛を受け、彼は実質的な報酬の分け前だけを持っていく（私にはそれを阻止することはできない）のだ。」

ディケンズは「本を書くために腰かけると、『何か慈悲心に富む力』がそれをすべて自分に見せてくれるのだ」と語っている。⁽⁸⁾

そんなばかなことがあるものかと不審に思う人も多いただろうが、文学の分野だけではなく、芸術創造の現場では、こうした例はなんら珍しいことではない。むしろ、名作、傑作といわれるものは、こういう過程を通してこそ生み出されるといってもよいくらいなのである。

それをもう少し現代的に説明しようとするならば、意識が広大な無意識界と接触する時、あるいは無意識界のある面が意識に働きかける時にこそ創造の力が発揮されるのだということになるかもしれない。

似たようなことは、科学の方面でも起こっているらしく、たとえば、アインシュタインはひげを剃るために鏡に向かっている時にインスピレーションがひらめくことが多かったとか、湯川秀樹博士は枕元に常にメモ帳を用意して、夢の中でひらめいたアイデアを書きつけていたとか、エジソンはわざわざ自分を半覚半睡の状態にして、その時に意識に浮かんでくる考えを発明に生かしていたといった逸話を聞いた人もいるのではなからうか。

それは文学や芸術の方で起こっている現象とは多少性質の異なるものかもしれないが、どちらの例も、創造、それも歴史に残るほどの創造には、日常の意識を超えた何かが関与しているらしいことがうかがわれて興味深い。

話題を小説に用いられる言語の方に戻せば、ここまで述べたことからだけでも、小説、それも世界の文学史に名を残すほどの小説において用いられる言語は、私たちが日常的に使用する言語や科学において使用される言語とは異なる性質のものであるということ、そして、小説とは一般に考えられているような合理的で客観的な構築物として存在しているのではないことは推し量ることができるのではなからうか。

(VI)

それをもっと具体的に考えてみるために、例として世界的によく知られているフロベールの『ボバリー夫人』を引いてみよう。

フロベールを選んだ理由は、彼が本格的写実小説の創始者、近代リアリズム文学の頂点を極めた作家とたたえられているからであり、また、彼は科学主義を信奉すること厚く、創作にあたっての資料調査の綿密さは伝説になっているほどであり、作家も科学者のごとく、客観的、公平無私、無個性、無感動であるべきだと考え、作者の主張や先入観が作品に反映することをつとめて避け、没個性の態度を保持して、観察された事実を書くべきものだと信じていた作家だからである。

そしてそうした作家にふさわしく、彼は一生を通して完璧な表現を求め続け、その場面にふさわしい正確な一語のために二晩も三晩も懊悩したといわれ、その厳しい文体上の彫琢と緊密な構成ゆえに、今日でも、文体や構成を重視する作家は彼に範を求めるといわれているからである。

このように説明すると、フロベールの小説こそは客観的描写の積み重ねでできている、合理的で客観的な構築物だと誤解しかねない人も思うし、そういう意識で読めば、それに応えてくれるのがフロベールの小説だといえるかもしれない。

『ボバリー夫人』はそういう作家の代表作であり、その真価は厳しく彫琢された文章表現と緊密な構成および文学的造形のたしかさにあり、フランス写実主義の一大傑作と評されている小説である。

そこまでいわれている作家の代表作の一節を引き出し、その文章が何を、どのように表現しているかを考察すれば、文学的(想像的)文章と科学論文や新聞記事、また日常的文章の類との差異が鮮明になるのではないかと考えたわけである。

そのための参考書としては、E.アウエルバッハ(E.Auerbach)の『ミメーシス』(*Mimesis*)をはじめとして数多くの研究書があると思うが、私は近藤耕人氏が『映像と言語』において試みているフロベールの文章の分析を借用したいと思う。

かって小説の文章と記述的文章の違いが判然とせず悩んだ経験のある身からみると、近藤氏の分析は一般の人のみならず、文学・芸術を専門とする若い人にとっても大きな意味をもつ場合があると考えられるからである。

できるなら氏の分析をすべて引用したいが、あまりに分量が多いので、ここでは私の判断で氏の言葉をつないでいくことを断っておく。

まずは原文とその日本語訳を示すことから始めよう。

...les auvents étaient fermés. Par les fentes du bois, le soleil allongeaient sur les pavés de grandes raies minces, qui se brisaient à l'angle des meubles et tremblaient au plafond. Des mouches, sur la table, montaient le long des verres qui avaient servi, et bourdonnaient en se noyant au fond, dans le cidre resté. Le jour qui descendait par la cheminée, veloutant la suie de la plaque, bleuissait un peu les cendres froides. Entre la fenêtre et le foyer, Emma cousait; elle n'avait point de fichu, on voyait sur ses épaules nues de petites gouttes de sueur. (Gustave Flaubert : *MADAME BOVARY*, Le Livre de Poche Librairie Générale Française, 1961, p.37)

どの窓庇も閉ざされてあった。木の裂けめを通して、日影が鋪石の床に細長い筋を伸ばし、その筋が家具の角々で砕けたり天井で揺らいだりしていた。食卓の上では、蠅が使いよごされたコップを攀じるのもあれば、底に残った林檎酒に溺れて唸っているのもあった。煙突から降って来た日の光は、延べ板の煤をピロードのように見せ、冷たい灰にいくらか青味を帯びさせ

た。窓とかまどとの間で、エンマが縫い物をしていた。襟巻も纏わぬので、露はな肩に汗の滲んでいるのが見えた。(フロベール『ボヴァリイ夫人』中村星湖訳 新潮社 第一編 三より。一部の字句を現代向きに訂正した。)

「これはシャルル・ボヴァリイが最初の妻の死後、ベルトオの農家へエンマに会いにゆき、台所に入ったときの描写である。夏も終わりのある午後の三時頃で、人びとは皆野良へ出、台所にはエンマ一人がいた。

ここには蠅の唸り声以外に音の描写はなく、台所とその隅にいるエンマの情景描写である。しかしそれは音の描写ができないからではなく、音がないからであって、ここが主として視覚描写になっているのは逆にその場の静寂を暗示していることになる。作者が意図して音を描写しない場合も、結果的には静かな世界を創造したことになる。

文章では実際に音を意味する言葉は *bourdonnaient* だけであるが、その他に人間の動作や物体、動物の運動などで音を暗示する動詞や名詞が沢山ある。それらは現実には音を伴わない情景を描写するものであるが、そこに使われている言葉の意味は聴覚的心象をも喚起するのである。これらの言葉によって、台所は数々の控え目な音のシンフォニーに満たされ、その中で蠅の唸り声が一際目立って聞える一方、木の裂ける音や日射の碎ける音のイメージまでもが想像の世界に加わるのである。

次にこの描写は主人公の、したがって作者と読者の視点の移動を暗示している。シャルルは台所に入るとまずエンマの姿を探すが、明りに慣れた目はすぐ暗がりの中にエンマを認めることができない。彼の目はまず閉ざされた窓庇へ、次に木の裂け目へ、そこから伸びる日射の行手へ、食卓の上のコップ、かまど、そして最後に暗がり慣れた目はその脇にいるエンマの姿を、更に露はな肩の汗までも認めるのである。これは映像について言うならば、一目で全体像を見渡すことができないほど大きな写真の画面を、作者の指示に従って視線を移していく過程に相当する。

作者はある表現意図をもって台所の情景の中から、日射とコップの蠅と延べ板の煤とエンマの肩を選んで描写する。その他の部分はすべてこれらの要素を基にした読者の自由な想像に委ねられる。そしてここに挙げた四つの事象の描写すら、言語の機能からいって現実の情景の極く一部に限られ、それに喚起される心象はまた読者の想像意識の作用である。木の裂け目は窓庇の古さを、日射の筋は夏の午後三時頃の暗い室内を、その影が家具の角で碎け、天井で揺れるさまは室内の鄙びた印象を、使ったままのコップ、残ったシドル、溺れている蠅は農家の投げやりな習慣、農夫の生活、不潔さ、そして働き手たちの不在の静寂を、ピロードのような煤はかまどの長い使用と変化のない因習を、青味を帯びた灰はかまどの冷たさ、休息を、それらは現在の時刻とその時刻の農夫たちの生活、そしてその繰返しの中に存在してきた台所の長い時間、その明暗と静寂を物語るものであり、そのすべてが田舎の単調な生活の墮性と無気力を表現する素材である。それはシャルルが台所について抱いた印象であると共に、エンマの生活を暗示するものであり、したがってエンマの生活についてのシャルルの印象を表現するものである。フロベールはシャルルの印象を直接それを意味する言葉で、暗い、静か、汚い、単調な、などと記述せず、その印象を惹き起こす対象物の状況を描写し、その描写の中に巧みにシャルルの印象を想像させる言葉を織り込むことによって、間接的にシャルルの印象を表現するのである。それらの言葉は個々の事象を極めて明快に特

微づけるので、いかにも対象の客観的な描写が行われているように思われるが、実はその特徴のつけ方こそシャルルの意識の反映なのである。

関係代名詞による三つの長い複文の描写が続いた後、*Entre la fenêtre et le foyer, Emma cousait;*の文が現れる。この一見客観的な事実の叙述、特に、最後に短く区切り、溜息のようにもれた Emma cousait の単文には、この文章がこの一節の中で占める位置と、エンマ自身が台所の中で坐っている位置とによって、シャルルが遂に、あるいは期待通り女を見つけた感動が籠められている。これはエンマの叙述というよりも、殆どシャルルの声である。

Emma cousait の後中止符も打たず、(;)で区切って小文字のまま二つの単文が続けてエンマを描写する。elle n'avait point de fichu, on voyait sur ses épaules nues de petites gouttes de sueur. ここにシャルルの心理は集約的表現を見出す。それまでの環境描写はいずれも、夏の淀んだ午後に煮つまってはけ口を求めるシャルルの情欲を表現する背景であった。エンマの姿はただ露わな肩に滲んだ汗となってシャルルの目に映り、それはエンマに対するシャルルの情欲のシンボルとなって、人気のない、暗い台所の隅にじっと坐っているのである。

フロベールは Charles voyait とは書かず、on voyait と書くことによって、あくまで主観描写の外形を避け、客観描写の形式に身をやつす。その場でエンマの肩に視線を注ぐものはシャルルしかないわけであるが、見たとは言わず、見えた on voyait と言うことによってエンマの肩を公開し、そこに読者の視線を誘い込むのである。

読者は自分の目で対象を見ているつもりで、実はシャルルの、そして作者の目と心を通じて対象を見ているのである。そこから得られる体験はシャルルのものでありまた作者のものである

このように、隅にひとりの若い女のいる室内の鮮かな描写と見えた一節が、その対象と言葉の入念な選択によって、その場に立って眺めている作中人物の意識を巧妙に構成していることが分った。それは作中人物の意識を表現する心象風景ではなく、現実の環境の描写であるが、環境そのものの意味を求めて描かれたのではなく、作中人物の意識を構成し、あるいは方向づける環境因子として並べられたのである。

フロベールの文章は作中人物の生活の状況の描写であり、その状況での人物の体験を人物の口を借りて語らず、状況の描写によってそれを読者に再体験させようとするものである。』⁽⁹⁾

長くなつたが、上に引用したフロベールの文章についての解説を十分にしようとするれば、おそらくここに示した分析の何倍もの言葉を費やさねばならないだろうし、その上、これだけの文章になると、人によって受け止め方がさまざまに異なるのが当然なので、極端な言い方をすれば、このわずか六～七行の文章が、何千、何万という解釈を許容するだけの内容を含んでいることになる。

そんなことがありうるのかと思う人がいても不思議ではないが、すぐれた文学作品の表現というのは、読者をその世界に引き込み、呪縛しつつも、逆に読者の自由な解釈を許容するという摩訶不思議ともいべき性質を持っているのである。特に小説の場合は、読者が現実世界から切り離され、その作品の世界に集中し、かつ自由な精神の活動が許容されてこそ、読者の想像力が喚起され、作品の中の出来事の実現協力と意味構成に参加できるのであり、

そこから感動するとか、おもしろいと感じるといった心的反応が活発に起こるのだといってもよいだろう。

そういう世界を創りあげている言語は、科学論文はもちろん、多少の冗漫性を含む日常伝達の言語や新聞記事の言語とは異なるものだという事は誰の目にも明らかだと思う。

それがどのように異なるものかについては、いま考察したフロベールの文章と対比してみればよいわけだし、他の作家の文章を分析して、それと比較してもよいと思う。

むしろここでの関心は、それだけの文章がどのように紡ぎ出されてくるものかという方にあると考えられるが、それはなかなかの難問である。というより、創作の当事者も含めて、誰にも明確な答が出せない問題だといふべきであろう。

その点を議論し始めると際限がなくなるが、先にもふれたように、人間の精神世界には、自然科学的枠組みには納まり切れない多種多様な現象が存在しているのであり、それを十把一からげにアブノーマルなものとして切り捨ててしまうというのでは、真に普遍的な科学の立場に立つことにはならないし、人間精神の最も豊饒な部分や最も創造性に富んだ部分を切り捨ててしまうことになってしまい、その人自身の人生が貧しいものになってしまうのではなかろうか。

創造性は、特に芸術のそれは、平明な日常性を超えたところでこそ発揮されるものである。それは時に巨大なエネルギーとなって、人間の潜在意識の奥深くまで分け入り、思いもかけぬものをつかんでくることが考えられるわけで、だからこそ何百年、何千年の時の試練に耐える作品が生み出されるともいえるのではなかろうか。

私たちがそういう現象をも含めて説明できる普遍的原理を手中にできる日が来るかどうかは予想がつかないし、怪しげなもの、危険を感じさせるものには安易に近づかないことが大切なことはいうまでもない。

しかし、私たちの住んでいる世界は、自然科学的原理ですべてが割り切れるほど単純明快な構造になっているわけではなく、真に創造的なもの、あるいは、時の試練に耐えるだけの価値を備えたものは、月並みな日常性を超えたところでこそ生み出されることが多く、またそういう領域を守備範囲とする言語があるのだということを知っておくだけでも、その人の世界観、人間観に深み加わるのではないだろうか。

話をフロベールの方に戻すと、科学主義を信奉し、客観描写に徹したと評されるフロベールにも、創作にあたってそのような不可思議な精神現象が起こっていたのかといえば、そうした観点に関心を持つフロベール研究の専門家に尋ねてもらうしかないが、フロベールに深く学んだペルーの作家で、世界的にも高名なマリオ・ヴァルガス＝リョサ (Mario Vargas Llosa) によれば、フロベールにも、「作家は自由に主題を選べない」とか、「主題とはこちらで選ぶものではなく、あちらから押しかけてくるもの」という発言が見られるとのことである。

それに関するヴァルガス＝リョサの解説があるが、これも長いものなので、その内容を私の言葉でまとめることにする。

「主題を選ぶにあたって理性を超えたファクターが決定的に介入するということがある。つまり、意志や意識が支配権を持たず、何かに服従する領域があり、そこに蓄積されながら、たいてい忘れ去られていたいくつかの重大な経験は、人間の行動や思考や夢などに、遠い根

源、奥深い理由として作用を及ぼしている。

違った時期、異なる環境での経験は潜在意識の奥にしまわれたり、新鮮に記憶されていたりする。自分のもの、伝え聞いた話、本で読んだ話、そんな経験が一緒くたに、ほんの少しずつ、作家の想像力の中に流れ込むと、想像力は強力な攪拌機のようにそれを粉々にして新しい物質に作り直す。これに言葉と内的秩序が与えられた時、新たな存在が誕生する。これが虚構のレアリテである。」⁽¹⁰⁾

ヴァルガス＝リョサの考えは、芸術作品、特に小説創作のプロセスの一端を示すものとしてすぐれたものだと思うし、何よりもわかりやすい点に、彼の力量の程が表れている。彼の考えを、さきの W. サッカーや G. エリオットなどの「オカルトめいた発言」に当てはめてみると、彼らの言葉が形而下的な色彩を帯びてくるから不思議である。

ヴァルガス＝リョサの解説を踏まえれば、先に述べた、文学とは、それを書いた人特有の意味を含む言葉を用いて、その人独特の世界を形成する性質を持ったものなのだが、同時にその世界が普遍性を帯びる性質も備えているものなどである、という主張の意味もよりよく理解されるかもしれない。

(VII)

このように議論してくると、現代一般の人が言語について漠然と思っていること、つまり、言語とは何よりもまず情報伝達の道具であるという考え方はあまりにも単純であり、そういう言語観しか持たなくては、当然その世界観、人間観も偏った、貧しいものになり、それがその人の人生の姿として反映し、ひいては私たちの社会全体が本当の意味での豊饒さ、創造性を欠いたものになってしまうことが、あらためて感じられるのではないだろうか。

したがって、私たちは言語の多様性、多彩性、多層性を理解し得るだけの感性を磨き、それほど言語を紡ぎ出してきた人間、そしてその人間を生み出したこの世界そのものも、「科学時代」に生きる私たちの想像を超えた精妙かつ絶妙なものだという感覚を取り戻すべきなのではなかろうか。

加えて、自然科学および科学技術が人間にとっていかに重要なものであり、その成果がいかに輝かしいものであるといっても、人間と世界の何もかもをその観点からだけでとらえようとするのは乱暴に過ぎる考え方であり、そこから人類の存亡にかかわるほどの深刻な問題が起こり、私たちが日常的に遭遇する大小の問題もそこに根を発するものが多いということを見自覚すべきでもある。

そして、立花隆氏ではないが、科学とはまだあまりにもプリミティブな発展段階にあるものだということ、それに、科学は自然の謎を解くことに挑戦し続けてきたが、解かれた謎はほんの一部で、大部分はまだ依然として謎のままに残っているのであるということをしかりと心に刻み、科学の華麗な業績と強大な力に目を奪われるあまり、科学がもたらしてくれるものに溺れ、流されてしまうことはつとめて避けるべきであろう。

そこまでは勢いよく言葉を発することができるし、同意してくれる人も多いと思う。しかし、「言うは易く、行ふはかたし」がこの世の習い、人の性というもので、科学の圧倒的な影響力の下で、「人間の尊厳性」とか「精神の自立性」を回復するのは容易なことではない。

何といっても、自然科学的原理と科学技術に代わって人類指導原理の中核に位置するもの

が見当たらないのである。

とすれば、私たちは本当に難しい状況に直面していることになる。つまり、自分たちの運命を託さざるを得ないものが、逆に自分たちの生存を脅かすほどの深刻な問題を引き起こしているのである。それは昔からいわれていることであり、ここであらためて嘆くことでもないが、それにしても何とも皮肉な成り行きである。

それだけの難問を前にして、誰にも名案があろうはずもないが、もし私たちが、真に巨視的な意味での、栄枯盛衰、生者必滅という諦観ないし達観に達することを拒否するのならば、それぞれが「守一隅」の立場に立つべきであろう。

近年とみに耳にすることが多くなった「パラダイムの大転換」とか「支配と進歩の原理から共生と循環の原理へ」といった言葉を見ていると、現在の閉塞状況を打破し、新時代への展望を開きたいと考えている人も少なくはないのだろうと感ぜられる。

そういう努力が奏功するかどうかは予断を許さないが、とにかくにも必要なことは、自然科学的世界観、人間観、言語観がすべてではないことを自覚し、言語も人間も世界も、私たちが科学的に理解する以上に豊かで精妙なものだということを思考の中に組み入れることではなかろうか。

その時、たとえば、「やっぱり女（男）は頭の良い人がいい」とか、「人間の真の偉大さとは魂のきれいなことだ」という、一見何でもなさそうな言葉がどのような体験と叡智に裏づけられたものかがおぼろげにでも理解できるのではなかろうか。

あるいは、さまざまな神話や寓話が人間に伝えようとしている奥の深いメッセージにも目が開かれていくのではないか。

さらに、人類最高の道徳といわれながら、人類史上誰一人実行できた人がいないと揶揄もされているイエス・キリストの「山上の垂訓」の意味することや、ダイアナ元妃の葬儀で引用されて、あらためて世界の人の耳目を引いた「コリント信徒への第一の手紙」の中に書かれている、これも誰にも実行できそうもない「愛」の意味するところを幾許かでも感じることができるようになるのではないだろうか。

私たちが現在直面している科学に関する問題は、科学の方にその原理自体を変更するほどの革新が起こるか、人間性に劇的な進歩と発展でもない限り解決の展望は開けてこないほどの難問である。

そのいずれについても見通しは暗いとはいえども、豊かな言語感覚を自分のものとし、世界の絶妙な姿を視野に入れた時に輝き出てくるかもしれない人類の叡智を信じ、それぞれの立場で努力を続けていきたいと思う。

注

- (1) 『信州大学繊維学部紀要・平成9年号』に掲載
- (2) 産経新聞・1997年・10月6日・朝刊に掲載された『私の一冊』の項
- (3) 河合隼雄：『日本人とアイデンティティ』（講談社文庫、1996）、p.311., p.369., p.386. を参照。
- (4) 藤岡喜愛：『イメージと人間』（NHK出版、1989）、pp.96-98. を参照。
- (5) 同上、pp.110-111. を参照。以下に引く藤岡氏の言葉は、それぞれ、p.100., pp.103-104., p.107. を参照。

- (6) 立花隆：『臨死体験・(下)』（文藝春秋社，1994），pp.254-255. を参照。
- (7) Richard P.Feynman：“*Surely You’re Joking, Mr.Feynman!*”
(W.W.Norton & Company, New York, 1997), Part5を参照。
(岩波書店から『ご冗談でしょう，ファインマンさん』と題して邦訳が出版されている。）
尚，このあたりのことは(6)の第23章～第26章も参照。
- (8) イアン・ウィルソン：『スーパーセルフ』（池上良正・池上富美子訳，未来社，1994），pp.25-43. を参照。
- (9) 近藤耕人：『映像と言語』（紀伊國屋書店，1974），pp.109-117. を参照。（文中の一部の字句を現代向きに変更した。）
- (10) マリオ・ヴァルガス＝リョサ：『ボヴァリー夫人』（工藤庸子訳，筑摩叢書，1990），pp.98-100. を参照。